

## 第一部 基調講演

「普段見ることのない角度（川）から見た都市・東京」

## 講演者プロフィール

### 押井 守（おしい・まもる） 映画監督

1951年8月8日生まれ。東京都出身。東京学芸大学教育学部美術教育科卒業後、アニメのプロダクションに入り「一発貫太くん」「タイムボカンシリーズ・ゼンダマン」などのテレビ作品を演出。所属を変えて「ニルスのふしぎな旅」「うる星やつら」を制作。その後フリーとなり、近未来の東京を想定したロボットアニメ映画「機動警察パトレイバー」を監督、関連コミックス1350万部、ビデオ100万本を売り上げ、宮崎駿、大友克洋両氏らとともに日本のアニメブームの火付け役となる。

このうち、「機動警察パトレイバーTHE MOVIE」（1989年）では、川から都市を見る、すなわち、普段見ることのない角度から見た都市・東京をとらえている。

1996年には、通商産業省（当時）と財団法人マルチメディアコンテンツ振興協会（MMCA）共催の「マルチメディアグランプリ」（マルチメディアコンテンツ関連産業の総合的な創造・育成及び振興を目的に様々な分野の映像作品および制作者を奨励、表彰）で「コンテンツ産業界の発展に貢献」として"人物表彰の部"の最高賞「MMCA 会長賞」を受賞。

#### 主な作品など

1995年：『GHOST IN THE SHELL / 攻殻機動隊』（監督）は、アメリカやイギリスでも公開され、翌96年には米ビルボード誌でセルビデオチャートNo.1を獲得。

2000年：脚本担当のアニメ映画「人狼（JIN-ROH）」、ポルトガル映画祭アニメ部門グランプリ受賞。

2001年：近未来をテーマにした実写映画「Avalon（アヴァロン）」はポーランドでのロケ作品で、第54回（2001年）カンヌ国際映画祭の特別招待作品となる。

2003年：「東京スカナー」「東京静脈」（以上、監修）

2004年：アニメ大作『イノセンス』は日本アニメで初めてカンヌ国際映画祭コンペ部門にノミネート。

2005年：愛知万博では、『中日新聞プロデュース共同館 夢みる山』のテーマシアター「めざめの方舟」の総合演出を務め、体感型映像空間を初演出。



### 野田 真外（のだ・まこと） 演出家

映像演出家、1967年北九州市生まれ。高校時代から押井守監督に傾倒し、演出家の道を志す。大学卒業後、CM制作プロダクション等を経てフリーの演出家に。CM・TV番組から、児童向けビデオ、グラビアDVDまで幅広く活躍中。また並行して文筆・評論活動も行い、97年には研究本『前略、押井守様。』を上梓。

監督作品の『東京静脈』は、2003年春にオープンした六本木ヒルズのオープニングイベント「世界都市展」用に制作された作品。イベントでは三面プロジェクターで上映し、臨場感を高めている。

最新作の『東京静脈R』は、その撮影の時に、逆ルートで撮影しておいた素材を使用。実際には全体で1時間強の行程を約三分の一に編集、音楽は新たに録音したものである。

（有料配信中 <http://www.cptv.jp/04-culture/0405-joumyaku/index.html>）



# 東京の川から

野田 真外（演出家）

## 01 プロローグ

私の作品『東京静脈』は、2003年に六本木ヒルズのオープニングイベントのために作られた映像作品である。イベントは東京や世界各都市のミニチュア模型などをメインに、都市論的なアプローチから都市と再開発についての様々な展示を行うというものである。そこで上映する映像、ということでの最初の企画依頼は「東京を普段は見ない角度から切り取った映像作品」という内容だった。こちらに先行して、東京に空からアプローチして最新鋭のハイビジョンカメラによる空撮映像で東京の様々な場면을写し出す『TOKYO SCANNER』という別の作品が進行していたので、こちらはその逆をやって全てが対になるようにしようと意図したので、空撮＝俯瞰する視点に対して水面から都市を見上げる視点を採用したのである。

実をいうと、この時点では「川からの映像」という手法にそれほど深い意味を込めてはいなかった。しかし撮影当日、日本橋川を遡上してみても、ようやく気が付いた。東京という都市の本質は、ある意味この川に集約されているのかもしれない、と。

## 02 撮影当日

四月一週の水曜日、我々撮影スタッフは浜松町の船宿からチャーター船に乗船、カメラをセットしてから隅田川を上って行った。川岸に咲くソメイヨシノもちらほらと、仕事であることを忘れそうな、のんびりした船旅である。

ところが日本橋川に入った途端、それまで大きく揺れていた波の振動がずっと収まり、辺りは不思議な静寂に包まれる。静か、というよりは音や風景が遠くに後退したかのようだ。目の前の日本橋にはたくさんの車や人が行き来しているにもかかわらず、スクリーンで遠い世界の出来事をのぞいているような感覚である。実際の距離感以上に周囲から切り離されてしまう、この不思議な隔絶感は何なのだろう？

今思えば、その辺りから感覚が少々ヘンになっていたような気がする。微かな悪臭を漂わせている汚水の濃緑の水面すらも何故か美しく、橋下の暗闇に太陽光を反射して微妙な陰影の揺らぎを映し出す。常磐橋、雉子橋、俎橋...いくつもの橋をくぐり抜けていると、あたかもタイムトンネルで時間を逆行しているようである。痺れたような脳味噌に、そうかここは違う時間軸にあるんだなという妄想がぼんやり浮かんで消える...

両岸に立ち並ぶ建物は全て、この川の時間に背を向けて建ち、化粧を



「東京静脈」より、  
日本橋川・俎橋近辺



常磐橋。日本橋より古い歴史を持つが、現在はほとんど使われておらず、記念碑的に残されている

してない舞台裏の素顔を無防備に晒している。非常階段の踊り場で喫煙サボタージュのサラリーマンが、築30年以上木造モルタル二階建てのペランダで洗濯ものを干すおばちゃんが、川面に浮かんだゴミと同じ速度でゆっくりと流れてきては、こちらに気付かぬまま視界の後方に消えて行く。ここはそんな彼らの日常には組み込まれない時の流れ、つまり「あちらの世界＝彼岸」を流れる三途の川なのだ。

位置的には東京のど真ん中を通っているのにもかかわらず、この川はとくに棄てられてしまった異界であり、幻のような静けさが支配する未知の世界であった。

### 03 棄てられた風景

そんな私の“発見”に遡ること15年、「東京の川の風景」をすでに発見していた映画監督がいる。私が私淑する映画監督・押井守である。まだバブル経済に日本中が浮かれていた89年に公開された劇場アニメ映画『機動警察パトレイバー』は、真っ当なロボットアニメであり、良質のエンタテインメント作品であり、さらには東京という都市の本質を描いた都市論映画でもある。

彼はこの映画で、高層ビル群、新宿や渋谷などの繁華街、お台場などの観光スポット等の東京の上っ面だけを描くのではなく、看板建築や廃墟、埋め立て地といった東京のはらわたとでも言うべき場面をも提示することで、東京という都市が本来持っている“危うさ”や“虚構性”を提示して見せた。そうした意味でも、また本来アニメ作品が内包すべきエンタテインメント性から見ても、日本のアニメーションのひとつの到達点でもある。

この作品を作るに当たって、押井守はアニメーションの制作スタッフを引き連れてロケハンを敢行、その時に選んだのが東京の川と湾岸地区だった。映画に描き出されていた、まさに“リアル”と呼ぶにふさわしい東京の映像はそのロケハンのたまものである。そして私が『東京静脈』でモチーフとしたのが、この時のロケハンコースであることは言うまでもない。

### 04 都市の静脈

撮影の船は神田川に合流。上を覆っていた“蓋”＝高速道路がなくなり、再び風景は一変する。しかし、外界から途絶した三途の川という印象に依然変わりはない。

三崎町の施設から、神田川に浮かべた船へ収集されたゴミが積み込まれている。この船によってゴミは埋め立て地へと運ばれて行くのだろう。そんな方法で千代田区のゴミが移送されているなどということはついぞ知らなかった。神田川はゴミを運搬する水運ルートとして今でも機能しているというのは、私にとっては発見であった。



秋葉原付近 JR 高架下。  
水面の反射が、橋の下の暗闇に  
映える



民家も川に向けた面はまるで  
無防備である

実は撮影開始時点ではまだ作品のタイトルを決めかねていたのだが、この時「静脈」にしようと思い定めた。物流の大動脈＝高速道路の下をひっそりと流れるかつての動脈である川には、静脈というイメージがぴったりだし、都市の老廃物＝ゴミ・下水を体外に排出するという機能的側面からみてもまさに静脈である。「静」という漢字を含むことで、あの不思議な静寂さをも暗示している。

#### 05 過去のない町

東京という町はかつては水運に恵まれて、文字通り「水の都」だった。江戸幕府は海と低湿地帯の埋め立てに力を入れ、たくさんの運河がその時同時に誕生した。その頃の川や運河は排水路・用水路・舟運などに盛んに利用されており、まさに都市の「大動脈」だったはずだ。

ところが現在、東京を見て水の都だと思う人はまずいないだろう。それは単に、明治以降の近代化に伴って、川はその動脈としての役目を陸運＝道路・鉄路に取って代わられてしまったことだけに起因する印象ではない。工業化や人口増に伴う排水汚染の深刻化、野放図なコンクリートの護岸工事、それらが生み出した悪臭...人々は急速に川を遠ざけるようになり、折からの用地不足も後押しする形で、東京の住人たちは次々と川に蓋をしてしまった。高速道路で上空を覆ってしまった川もあれば、暗渠で完全に封印されてしまった川もある。いずれにせよ、現代東京における川はまったく身近な存在とは言えない。いまでもすぐそばに流れているにもかかわらず、誰もその存在を意識しない。

都市化や開発の是非を問うことが、この作品の目的ではないし、私自身も東京の人間ではないこともあって、その辺については割と覚めた地点に立っていると思う。ただ、人々が忘れ去ったとしても、川は依然としてそこに流れ続けている。そのことだけは揺るぎない。



奥は後楽橋。ごみ集積施設からこぼれたと思しきゴミが無数に浮いている

本稿は、「河川文化」第31号(平成17年9月、(社)日本河川協会発行)に一部手を加えて再構成したものです。

